

## 重症心身障害のある方々による「見守り隊」について

ケアホームみらい 吉田隆俊

「さようなら」「気をつけて帰ってね」。

「ひがしまつやまし」と書かれた蛍光緑のベストと帽子を身に付けて、小学生の下校時の「見守り活動」（通称：見守り隊）に、ケアホームみらいに住む重症心身障害の方々が参加し始めた。不思議そうに見ている子、笑顔であいさつする子、「なんでイスに座ってるの？」と話しかけてくる子、ハイタッチする子。子どもたちの素朴な反応が印象的だ。

ケアホームみらいでの暮らしは今年で4年目を迎える。生活も落ち着き、利用者さんたちはそれぞれに人間関係や活動の幅を広げてきた。しかし、一方ではせつかく地域に暮らしているのに、その人間関係は福祉関係者がほとんどで、同じ地域に暮らす方々との関わりは無かったに等しい。そんな問題意識から今年は地域住民の方々との関わりを一つのテーマにして支援を検討してきた。

東松山市地域自立支援協議会の中にある「重症心身障害児・者の生活を支えるプロジェクト」（以下：重心プロ）では「本人の意思」を主題としながら様々な課題に取り組んできた。その一つに「地域との関わり」があり、「見守り隊」のアイデアはそこから生まれた。

多くの場合、重心の方々はサービスの「受け手」となる。また、地域社会との関わりにおいてもイベントへの参加や買い物などいつも「お客様」である。

重心プロの設立目的に「その人の存在が地域社会に貢献するような取組を考える」とある。単なる受動的な存在としてではなく、彼らが地域に貢献できる存在であること示す活動として見守り隊は素晴らしいアイデアだった。

しかし、見守り隊に参加するまでには多くの方々の協力が必要だった。地元の自治会や、すでに活動中の見守り隊、市役所の政策推進課、そして地元小学校。こうした地域の方々との関わりはとても嬉しい事ではあったが、困難も少なくなかった。重症心身障害の人とはどのような人たちなのか、普段どんな生活をしているのか、なぜ見守り隊に参加するのか等、なかなかうまく伝える事が出来なかった。それは、自分がいかに「障害」とか「社会参加」というイメージを共有できる福祉関係者としか関わってこなかったかという事だと思う。しかし、ありがたい事に、「県内でも障害のある方々が見守り隊に参加しているケースはありません。素晴らしい取組みなのでぜひ進めましょう。」と見守り隊の代表の方が実現に向けて尽力して下さったし、市役所の方は連絡調整の中心を担って下さった。このように話し合いを重ねながら少しずつイメージを共有することが出来たのだった。見守り隊を始める前に、地元の小学校では担任の先生から生徒に説明があったという。こうした地域の方々のご理解と連携があって、見守り隊は実現したのだった。

見守り隊には生活介護事業所のスタッフやヘルパーが同行する。この活動を通じて、関係する地域の方々や小学生と障害のある方々が自然に出会えるきっかけになると嬉しい。また少し大げさに言えば、重心の方々が参加する見守り隊がこの地域の日常の風景になることが、共生社会への第一歩になることを期待している。